

---

# 流星のロックマン【Our life】

勇輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロツクマン【Our life】

### 【コード】

N0770H

### 【作者名】

勇輝

### 【あらすじ】

ディーラーの野望が終わって数ヶ月……。あれからのスバル達の生活を見てみましょう……。

【1st story】第1話 中学進学（前書き）

どうも！勇輝です！

え〜ワールドツアーは間違えて消してしまいました……。誠に申し訳ありません！

で、罪滅ぼしとして新しいのを書きました！

是非、ご覧下さい！

【1st story】第1話 中学進学

1st story

小鳥の囀り（さえずり）が、  
太陽が照らしている、世界を支配する。  
季節は春。

花粉症が酷く、活発に暴れてくる頃と  
いっても過言ではないだろう。

12歳の僕は今年中学へと進む。

期待と不安が僕の心の中で入り混じっている。

そんな中、僕は気持ちよく寝ていた。

だが、騒音ノイズが聞こえてくる。

『スバル〜！ 早くいかねえと遅刻するぜ〜！』  
「う、うん……」

FM星からの逃亡者ウォーロックは、僕を  
起こそうと必死になっている。

ウォーロックは何故か勝手にウィザード・オンにしていた。  
もう、勝手にやるなよ……というのが僕的心情だった。

まあそんなことを思いながらも僕は  
ベッドからでて、着替える。

今日から、中学なので制服なのだが  
私服でもOKなので私服に着替える。

目を擦りながら、下へ行く。  
すると、母さんが朝食を作り、父さんがテレビを見ていた。

「お！スバル、今日は早いじゃないか！」

その言い方は、僕が毎日寝坊しているようなものじゃないか。

「ああ、おはよう、父さん！」

『大吾！ 今日も元氣そうじゃねえか！』

「当たり前だろう！」

『大吾……苦しい……』

ウォーロックは父さんに首を締め付けられていた。

僕は笑いながら見ていた。

助けを求められたが、KYと思われたくないの  
でただただずっと見ていた。

僕は朝食を摂ると、洗顔等を済ませ  
家を出た。

そこには、いつもの姿が見えた。

「スバル君、おはよう」

「オッス！ スバル！」

「おはようございます、スバル君」

「よおスバル！」

委員長こと「白金ルナ」と、

牛井ばかり食べる「牛島ゴンタ」と、

背の小さい天才「最小院キザマロ」と、

元ディーラーの「ジャック」がいた。

皆はいつもと違い、私服が変わっていた。  
僕も変えてこればよかったな、と  
後悔した、僕だった。

「さあ学校に行きましょうか」

「「「「お〜！」「」「」

委員長の言葉により

僕達は学校へ向かい歩き出した。

## 第2話 帰宅

僕たちが校舎に入ると、  
クラスが振り分けられている名簿があった。

僕と、ジャックはA組。

委員長と、ゴンタはB組。

キザマロはC組だった。

どうやら、ここの学校はE組まであるらしい。

結構、生徒数が多いのかなというのが

この学校にきたときの第1印象とだった。

「それじゃ、クラスへいきましよう！」

「「「「お〜！」「」「」

委員長の言葉により、

僕達は教室へと、向かった。

A組に入ると、すでにほかの生徒は着席していた。

ジャックと僕は着席して、体育館シューズを机の上に置き、  
着席していた。

しばらくすると、校内放送が聞こえた。

「体育館へ新入生は行ってください」

どこに体育館があるのか教えてくれよ！！

と思ったが、口にはせず、体育館へ向かった。

体育館について、番号順に整列して、静かにしていると  
校長からくだらない挨拶がおり、担任が発表された。

「A組 社会科担当 水野先生。  
B組 数学科担当 大澤先生。  
C組 英語科担当 大林先生。  
D組 家庭科担当 浅見先生。  
E組 国語科担当 今崎先生。 以上、です。」

と、校長から挨拶が終わると僕達は再び教室へと向かった。

また、着席をして、待っていると担任の水野先生が入ってきた。

「おはよう！」

「……おはようございます」「……」

「え、今回担任を勤めさせていただきます。水野<sup>みずの</sup> 義弘<sup>よしひろ</sup>と申します

！」

水野義弘というのが今年の担任の名前らしい。

よりによって社会という一番嫌いな科目の先生になって、

僕は正直シヨックを受けている。

だが、その分ジャックは嬉しそうだ。

ジャックは、社会が比較的得意だから、と言う理由だろうと僕は推測をした。

こうして、先生の話もおわり、僕達は家へ再び帰った。

「ただいま」

『まだ、いねえだろ』



「それもそうだね」

僕は手洗い・うがいを済ませ、テレビを見る。

すると、ミソラちゃんが歌っている番組がやっている。

国民的アイドルはちがうなあ〜と感じる。

「そついえば、ミソラちゃんは最近なにやっているんだろ」

『ほお〜！ 何だ？ お前はあの女に興味があるってか？』

若干あたりだが、概ね外れている。

「ちがうよ！ 最近あっていないからさ……」

『ああなるほどな』

案外簡単に納得した、ウォーロック。

長いこと一緒にいるから、そついうことはわかっているのだろう。

## 第2話 帰宅（後書き）

どうでしたか？

今日は学校の授業がありました！

でも、その後に仕事が……。

とんでもないハードスケジュールです（笑）

第3話 仕事終了(前書き)

ちょっとヒロイ(?) シーンが出てきます。

### 第3話 仕事終了

「お疲れ様でした〜！」

私は、今日の撮影を終え、楽屋へ戻る。

ハンターを見てみると、新着メッセージが一件。  
差出人はマネージャー。

「はあー」

つい、溜息も出してしまうぐらいの失望。

あ〜！何か楽しいことをしたい！！

と、願うが、その夢ははかなく碎け散った。

なぜなら、今週のスケジュールはノンストップで  
仕事が続くのだ。

体が持たないと事務所に言えたらどれだけ最高なんだろうか。

でも、ファンのためにも頑張らなくてはいけない。

心の中で矛盾が生じている。

『大丈夫？ ミソラ？』

ソファに座って、俯いていた私を

心配してくれたのか、ハープは訊ねてきた。

「大丈夫だよ！」

『次は、早朝8時のお目覚めテレビよ。だから、起床は5時30分  
ぐらいね』

「今、何時？」

『今は11時ぐらいよ』

どんどん気持ちが悪んでいく。  
だが、こんなことでへこんでいる暇は無いのだ。

『楽屋でシャワー浴びて寝なさい』  
「うん」

私は、楽屋のシャワー室へ行く。  
服を脱ぎ、シャワーを浴びる。  
嗚呼、なんて気持ち良いんだろう。  
それぐらい疲れが溜まっていたのだろう。  
シャワーのお湯が私の体を浴びせ続ける。  
同時に疲れが無くなっていく。

シャワーから出て、体を拭き  
楽屋のメインルームに戻る。

スバル君、今何やっているんだろう。

そう思うと、私はスバル君の顔が見たくなってきた。  
抑揚が激しいのが私なのだ。  
でも今は寝ていると思うので、電話はしなかった。

「お休み、ハープ！」  
『おやすみなさい』

そういつて、私は  
ソファへ寝転がり、眠りに着いた。

外は、車の音が聞こえていた。



## 第4話 彼

朝の光が私の顔を照りつける。  
朝かと思い、体を起こす。

目を擦りながら時計を見る。

時間は5時10分。

予定通りの時間だ。

「ハープ、おはよう」

『おはようミソラ。今日は早いじゃない』

「いつも早いんだけど……」

何故か突っ込まれたが怒りはせず  
更衣室へ行き、服を変える。

「今日の仕事場どこだっけ？」

『最初は、ナゴヤスタジオでその次は、コダマタウンよ』

「嘘お!?!」

『嘘言つてどうするのよ』

コダマタウン。

久しぶりにスバル君に会えるかもしれない。

そう思うと私は、心が弾んできた。

「よっしゃー！ 早くナゴヤスタジオへいこうー!」

『ギャップが激しいわね……』

「トランスコード！ ハープノート!」

私は電波変換してウェーブロードを進んでいく。

住民たちはまだ、早朝なのか  
人影が全く見えない。

そんなことを気にせず、私は進んでいく。

ナゴヤについた頃には7時だった。

名駅にいくと、人は溢れんばかりだった。

大方、仕事場へ向かっている途中なんだろうと思った。

「やっと着いた〜！」

『さあ早くスタジオへ行きましょう』

中に入ると、あまり見たことの無い方が沢山いた。  
私は撮影の楽屋へ行き、出番を待った。

仕事が終わり、次はコダマタウンへ向かう。

ナゴヤからコダマタウンへは結構遠い。

私は電波変換して、コダマタウンへと向かった。

コダマタウンに近づけば近づくほど

私の心はドキドキしていた。

早く、スバル君に会いたい。

そんな気持ちが私の心の中で

おきているのだろう。



かれこれ、2ヶ月ぶりぐらいだろうか。

電話もせず、メールもせず、ただただ仕事に打ち込んできたのだ。

我慢していたこの気持ちをはちきれそうなくらい

私はドキドキしていた。大袈裟かもしれないが。

「お疲れ様でした〜〜!!」

コダマタウンの仕事が終わった。

今の時刻は13時。次の仕事は17時から。

2時間ぐらいなら、スバル君とゆっくりできるだろう。

仕事が終わわり、私はスバル君の家まで向かった。

すると、交差点を曲がったところに

彼は、立っていた。

「ス、スバル君……………」

「ミ、ミソラちゃん……………?」

#### 第4話 彼（後書き）

どうでしたか？

なんだか、書き方が恋愛小説に

なっってきているような………？

まあいつか（笑）

次回もお楽しみに！！

## 第5話 恋心（前書き）

今日は物凄く短いです。  
許してください><

## 第5話 恋心

「ミ……ミソラちゃん、どうしてここに？」

僕は驚いた。

こんなところで久しぶりにミソラちゃんに会えたから。

「わ……私はスバル君に会いに行きたくて……」  
「僕も会いたかったよ」

僕の心が自然と高揚していく。  
これが恋と言うのだろうか？

でも、あくまでミソラちゃんは友達。

それと同時に、絶大な人気を誇る、シンガーソングライターだ。  
そんな彼女を僕は好きになっていいのだろうか？

だが、こんな気持ちを抱いてはいけないのだ。

友達だからという理由もあるが、  
日本中から、非難を受けてしまうから

「それは、私も同じ」  
「そうなんだ」

彼女の声はどこか、元気じゃなかった。

理由。

おそらく、疲労だろう。

「ねえ、スバル君」

「どうしたの？」

「今週の土曜日、どこか旅行とか行かない？」

「え？」

旅行か。

家族とも最近行ってないなあ。

この際ちようどいいか。

「いいよ！」

「じゃあまた、連絡するね！」

「わかった！」

「じゃあね！」

彼女はそういい残して、電波変換して帰っていった。

ミソラちゃんの休みにはちようどいいのかな。

僕も疲れていたし。

『えらい、今日は顔が赤くなかったか？』

「え？ そう？」

『これが恋っていいのか？』

恋。

辞書で調べると、心が高揚すること。

今日の僕は明らかに高揚していた。

いや、違う。

僕とミソラちゃんは、

友達だから。

## 第5話 恋心（後書き）

どうでしたか？

ところで、皆さんは問題解けましたか？

今回は流星1から出したので次回は2になると思います。

ちなみに、僕もやりましたが100点とれました。

あと、今日は何故か16時から21時まで寝ちゃったんですよ。  
何でしょう？（笑）

## 第6話 運勢

僕は家に着いて、自室に戻った。

今日は宿題も何も無いので、ゆっくり休むことが出来る。

僕は感覚を思い出していた。

あの衝動は抑えられなかった。

運命の人を目の前にして、足も震えていた。

怖いとか、そんな理由ではない。

でも、わからない。

『オイオイ、スバルどうしたんだ？ こんな俺でもよけりや相談乗るぜ？』

「いや、大丈夫なんだけどね……」

『じゃあどうしたんだよ？？』

「わかんない」

『それじゃ、俺も相談乗りようがないじゃねえか』

ウォーロックも半ばあきれている。

こんな気持ちを自白できるわけ無いじゃないか。

……でも、一緒に戦ってきた、友達だ。

ぼくはどうすればいいのだろうか……？

「はあくとりあえず、寝ようかな」

『まだ夕方だぜ？』

「いいじゃん。疲れたんだから」

そういつて、僕は目を閉じ、眠ったのであった。

眠りに落ちれば落ちるほど、さっきの感覚は嘘のように忘れて言っ

たのだった。

私は今日の仕事を終え、家に帰っていた。  
ミソラ  
久々の我が家はどこか懐かしいにおいを感じた。  
やっぱ自分の家っていいなと思う。

今日は嬉しかった。  
スバル君に久しぶりに会う事ができて、心から嬉しかった。  
約束も出来て、今日は本当に心が弾むほど嬉しい。

私、今日ツイてる！？

そう思った。

ソファで横になりながら読んでいた、雑誌を読み終え  
私はテレビをつけた。  
すると、占いがやっていた。  
一般的にやっている星座占いと言う奴だ。  
私の誕生日は8月2日。しし座だ。

「明日の1番はおとめ座！ 何でもうまくいくかも！」  
はあ〜乙女座か〜。  
と、思っていると、私に悲劇が訪れた。

「明日の最も運勢が悪いのは、しし座……」



私は口を開きっぱなしだった。

そして、その翌日、本当に運悪く  
怪我ばかりしてしまうのだった……。

## 第6話 運勢（後書き）

どうでしたか？

今日は1500メートルをテストで走りました。

結果は6分30秒・・・。

早いのでしょうか？（笑）

第7話 数学（前書き）

今回は

正直どうでもいいですね（笑）

## 第7話 数学

時は流れて3日後。

春の陽気さも段々薄くなりかけている。

僕は今、学校で数学の授業を受けている。

大澤先生の授業は別名、「鉄の数学」とも言われている。

というのも、大澤先生は学校の中では指折りの厳しさを誇るプロ中のプロの先生だ。

実際昨年、数学の偏差値が40の人を61まで上げたこともあるだとか。

僕は外を眺めながらノートを写していく。

数式と言う名の問題を解くよりも、宇宙と言う名の疑問を解くほうが数倍楽しい。

ああ、もう木が生い茂ってきているなあ。

そう思いながら、外を見てみると、  
なにか僕を呼んでいる声がする。

「星河〜！」

「は、はい!？」

現在の心拍数約110。

めっちゃあせってきている。

「黒板にこの連立方程式をとけ！」

そういわれたため、僕は前にでてチョークをとる。

問題は上の式が  $4x + 5y = 36$ 。下の式が  $5x - 3y = 21$ 。

問題はそう難しくない。

僕は脳をフル回転させて考える。

数秒後。

解がでた。

僕はガリレオ級のスปีドで書いていく。

皆は驚きの表情を隠せない。

特に、ジャック。

「先生、あつてますか？」

「よし、星河！ 流石だな！」

クラスから拍手がでる。

僕は席に着くと、ハンターからウォーロックが出て来た。

『ていうか、あの問題よく分かったな』

「解が分数になるから心配だったよ」

『だろっつな』

そういつて、数学の授業が再開された。

## 第7話 数学（後書き）

先生がだした問題皆さん分かりましたか？

僕も答えを考えていなかったなので、僕も

計算しましたが、まあ〜これがめんどくさい！

分数ばかりで超イライラしていました（笑）

ちなみに僕の答えは  $x \parallel 2 \ 1 \ 3 / 3 \ 7$ 、 $y \parallel 9 \ 7 / 3 \ 6$  になりましたが皆さんはどうなりました？

## 第8話 暇

数学が終わり、HRが始まる。

HRの内容は、特に大した物では無く、僕はずっと外を眺めていた。歩いている人たち、レールを走る電車。

本当に平和になったなあと、心の中でそっと思う。

平和が一番だなあと僕は思う。

HRが終わり、僕は委員長たちと帰る。

いつもの平凡な会話をして、皆と別れる。

そして、僕は平坦な道を歩く。

『暇だ〜〜!!』

ハンターVGから出て来て叫ぶウォーロック。  
周りの人もビックリしていた。

当然僕もだが。

「何だよ、ウォーロック」

『暇だ〜!! なんか面白いこと無いのか!!?』

「とはいつてもウォーロックにとって楽しいことって何だよ?」

『ウィルスを倒す。』

それじゃあ、僕も巻き添えじゃないか!!

ということ、僕は話をそらそうとする。

「じゃ、ウォーロックだけで行ってきて」

『何言ってるんだ! お前もいっしょだ!』

「え〜」

『え〜じゃねえ！ かばん置いてさっさと行くぞ〜！』  
「わかったよ……」

僕は家にかばんを置いて、僕は再び外へ出て  
ウエーブステーションの近くに行く。

そして、僕は叫んだ

「トランスコード！ シューティングスターロックマン！！」

青き流星の戦士、ロックマンに変身した

電波変換したのは久しぶりだったので、変な違和感を覚える。  
とりあえず、ウォーロックと相談する。

「どこ行く？」

『どこでもいいぜ』

「じゃあ、適当にウイルスと戦おうか」

『ああ〜！』

そういうと、ウォーロックはビーストスイングを練習しだした。  
その時のウォーロックの目はキラキラしていた。  
僕はそんな彼をみて、ついふふつと笑ってしまった。

「あつ！ ウィルスだ！」

『よっしゃ！ 行くぜ〜！！』

ウイルスとの戦い。

というかウォーミングアップが、始まった



## 第8話 暇（後書き）

今日はバスケットの練習をめちゃしてきました！

結構疲れましたが、バスケットは面白いし、楽しいしやっぱり最高です（笑）

皆さんは何のスポーツやっていますか？

## 第9話 準備

「ロックバスター!!」

僕の左腕から放たれる銃弾がウィルスに命中する。

だが一発では倒れないし、数も多い分、

僕は内心焦った。

「バトルカード！ エドギリブレード!!」

僕にとってこいつは便利なバトルカードだと思う。

なぜなら、沢山使えば攻撃力が上がるうえ、

いろいろな技が繰り出せるからである。

以前、カイパーとの戦いでもエドギリブレード3枚で

「サウザンドワールド」と言う技を出したからである。

今回は敵が多いので「サウザンドワールド」と言う選択技は無い。

理由はさっきの技は1体の敵により強いダメージを与えるためにあるだけで、

今回は無数のウィルスがいるためである。

僕は目を閉じた。

ウィルスについて

エドギリブレード〓複数使う……………1

複数いる〓時間がかかる……………2

短期決着〓攻撃範囲を広くする……………3

1〓3より、

攻撃範囲が広く、複数使用すればよい。

よって、

回転しながら攻撃すればよい。

「バトルカード！ ハリケーンダンス！！」

僕は風をおこして、

エドギリブレードを横に2つ持ち攻撃した。

すると、見る見る敵が倒されていく。

そして、いつの間にか全てのウィルスが倒されていた。

『よっしゃ〜！ イライラ吹っ飛んだし、準備完了だー！！』

「え？ 準備??」

ウォーロックは電波変換を解除すると指示を出す。

言うとおりに僕は解除して、家に帰った。

ドアをあけるとクラッカーの音が響き渡る。

「お帰り（なさい）！！ スバル！！」

父さんと母さんが三角帽子を被って待っていた。

## 第9話 準備（後書き）

どうでしたか？

今日はカラオケ行ってきました！

友達から「歌うまいね〜！」って褒められて  
感激です（泣）

第10話 パーティ、ミンラの歌（前書き）

今回出てくる歌は、

ハートウェーブの続きを僕が考えた物です。

## 第10話 パーティ、ミンラの歌

「父さんと母さん、何やっているの？」

「スバル。今日は何の日か思い出してみろ」

僕は父さんに言われたとおり、記憶を回想してみる。  
なかなか答えが出てこない。

考えていると、ウォーロックが勝手に、  
ウィザードオンして出て来た。

すると、ウォーロックは小声で父さんにしゃべっている。

『なあ大吾、今日って結構めでたい日じゃねえか？』

「そうだ。よく分かったな！」

『うるせえ、これぐらいはわかるんだよ』

ウォーロックは話し終わると、ウィザードオフして  
ハンターV.Gの中に帰っていった。

あれから考えているがなかなか答えが出てこない。

「母さん、今日何の日？」

「ふふふ。スバルも自分の年を忘れたのかしら？」

「え？ 11だけど？」

そう言い返すと、母さんは小さく笑った。

「違っわよ。あなたは、12歳よ！」

「え！？ あっ……！！！」

そうか。分かったぞ。

これで全て分かった。今日は僕の誕生日だったんだ。

「お誕生日、おめでとう！」

「ありがとう！」

ウォーロックも、笑いながら喜んでいた。まさか、自分の誕生日を忘れるとは……。笑えてしょうがない。

「さっ、はやくご飯を食べましょう！」

こうして、僕達は卓を囲んだ。机の上が輝いて見えた。

なぜならパーティーだけあって、豪華な食事が満載だったからだ。

僕は食べ物を中心に運んだ瞬間、これほどの快感を味わったのは久しぶりだと感じた。

そして、母さんたちと会話をしていると

ミソラちゃんがテレビで歌っているのを見た。

「強く、高く、届くまで、輝いて」

今、ハートウエーブを歌っているのだろう。

ここで、終わりかと思ったらまだ続くようだ。ここからは初めて聞く。

「交わるマインド それぞれの明日を変えて

同じ気持ちで 会話をして伝えるよ

悲観 憎しみと苦しみ

心 貴方と一緒に変えてゆく

見上げる夜は2人の 幸せを願うよ

描く希望を輝かす

絶対故に この手で つかむ未来の扉

喜び 温もりを手にするまで あきらめない

「

.....。

後ろを見ると、パーティは終わっていたようだ。



第10話 パーティ、ミソラの歌（後書き）

どうでしたか？

今日はずっと、バスケしてました！

さらに今日はさえていて、フェイダウェイが入りました！  
入った時、やった！って正直思いました（笑）

第11話 前日の夜(前書き)

今回は、なんかどうでも良いような……。

## 第11話 前日の夜

僕は番組を見終えた後、自室に戻っていた。

そして、黙々とレポート用紙に何かを書いている。

その内容は学校の理科の時間で、何かを調べてレポートに書いて提出すると言う物だった。

僕は宇宙の歴史について書いている。

他の人は、百科事典やウェブネット（今風に言う、インターネット

ト）などを使って

調べているが、僕はめんどくさいので自分の頭脳に蓄えてある知識だけで

レポートを次々に書いていく。

中学生では見慣れない、用語、数式、文字……………。

無造作に書いている数式が、なんかレポートをかつこよくさせているかにも見えた。

まあ錯覚だと思っが。

「今日何曜日だっけ？」

「ああ？ 今日金曜日だろ？」

「ええっと、あしただったよね……………」

「何かあるのか？」

「ミソラちゃんと旅行しに行くんだよ！」

「オイオイ！ だったらハープもいるじゃねえか！！！」

前から疑問に思っていたが、

何故、ハープをそこまで嫌っているのだろうか？

いくらなんでも異常なような気がする。

まあそんなことしていてもしょうがないので、母さんに明日の予定を言いに行った。

「母さん、僕」

「ミソラちゃんと旅行しに行くんでしょう？」

「え……？　なんで分かったの？」

母さんは人の心が分かるのかと思った。

まさに以心伝心。

「何年、アンタの母親やっていると思っているのよ」

母さんがにつこり笑いながら話してくれた。

本当に以心伝心だった。

母さんに言いたいことを伝えたため、僕は準備に取り掛かった。

準備が全て終わると、ハンターV.G.がなっていることに気が着いた。

「やっほー！　スバル君！」

「ミソラちゃん、明日のことなんだけどどこに集合する？」

「んー。ナゴヤ駅にする？」

「わかった！　10時集合で良いかな？」

「いいよ！　じゃあまた明日ね！」

「うんー！」

そういって、ミソラちゃんとの連絡を終えた。

10時にナゴヤ駅集合と言つことを僕はすっかり記憶した。

その後、僕は風呂に入って、ゆっくり寝たのだった

。

第11話 前日の夜（後書き）

どうでしたか？

今日は雨がやばかったです！

制服が、めっちゃ濡れて、

髪型がストレートからほぼオールバックに

変わっていました！（笑）

でも、いっか！と思い、そのまま家に帰りました！

## 第12話 飛行機

土曜日。

僕はナゴヤ駅に来ていた。

ナゴヤ駅の周りは凄かった。

青波線やら、新幹線やら、高層ビルやら……………。

いろいろな物が僕の視界に飛び込んでくる。

あの、新幹線どのぐらいのスピードで走っているんだろう？

普通の新幹線は300キロぐらいと言われている。

速いのだと、450キロとかもいたりする。

新幹線は今まで、事故（脱線とか）を起こしたことが無い。

それぐらい、安全性に富んでいると言えるのだろう。

10時5分。

しばらくしていると、彼女は向こうから手を振りながらやってくる。

「スバル君……!!」

はあはあと息を切らしている。

相当、急いだのだろう。

「大丈夫？ それより今日はどこ行くの？」

「北海道だよ！」

「北海道!？」

「うん」

平然と答えるミソラちゃん。

僕は内容がいまいち把握できていなかった。

「どうやっていくの?」

「今から、空港に行くんだよ!」

ということ、電波変換していくことになった僕たち。

電波変換しようとした時、ウォーロックが

ギヤーギヤーうるさかったが、一言言ったら、

一発で了承してくれた。

今度、ドラマのDVD買ってあげるから!

マジでか! よっしゃ! 行こうぜ!!!

こんな、いとも容易く引つかかったウォーロック。

こうして、電波変換してついた、空港。

空港の名前は「セントレア空港」。

ここは、飛行機を利用するためだけではなく、

グルメ街としても有名である。

作者も、このラーメンを食べたことがあるだとか。

「じゃ、パスポートで、行こうか!」

「うん!」

パスポートを見せて搭乗ゲートへと向かう。

次のフライトまで10分。

急がなくてはならない。

大急ぎで走って着いた飛行機。

何故か、サテラポリスとして、ファーストクラスに座ることが出来た。



僕的には、エコノミーで十分なのだが。

「シートベルトを着用してください」

そういわれて僕と、ミソラちゃんはシートベルトをつけた。すると、機体は斜めになった。

こうして、飛行機は北海道へと向かうのだった。

## 第12話 飛行機（後書き）

どうでしたか？

なんか、最近腕の脈がもの凄い見えるようになりました・・・。

これ、大丈夫なんですかね？

ドリブルやりまくったり、シュート打ちまくったりしていたらこう  
なりました（笑）

## 第13話 ホテル

翌日。

飛行機は無事、札幌空港に到着していた。

僕達は、荷物をとり、札幌を歩いた。

周りはナゴヤとはまた違う雰囲気を持っていた。

違う……と言われても、何が違うのか僕自身も分からない。

作者の話によると、

北海道は変わった地名が沢山ある。

代表的なものは「ニセコ」だ。

ちなみに、このニセコと言うのは、アイヌ語という

異民族の言葉から、出来ている。

この場合、「ニセコアンベツ川」という言葉から出来たと言われている。

話すと、長くなるので作者の話はここまでにしておこう。

さて、僕達は今ホテルに来ている。

中の内装はまるで「和」を連想させるかのような

内装になっていた。

綺麗ともいえるが、変わった風を持っている。

何よりも、印象的だったのは、ロビーに机がたくさん置いてあったところだ。

「あの、机なんだろうね？」

ミソラちゃんが興味深そうに聞いてくる。

「あれは麻雀卓だよ」

「麻雀？ おじさんがやる奴？」  
「そうそう、それぞれ」

別におじさんだけがやるわけではないのだが……。  
現に、作者自身もやっているのだ。  
13歳と言う若さにして。

それはさておき。

ミソラちゃんは、チェックインを済まし、驚きの発言をした。

「スバル君の名義で予約したから、代金はスバル君が払ってね！」

なんで勝手に僕の名義をにするんだよ……。  
代金ならまだしも……。

まあ心の嘆きは置いておいて、僕達はエレベーターで、  
用意された部屋へと向かった。

「「うわあ〜〜！！」「」

用意された部屋はまるで、天国のようだった。  
和室には、また麻雀卓が置いてあって、  
洋室には、お姫様が寝るようなデカイベッド。  
そして、中央には、液晶テレビと大きい机が置いてあった。

「こんなところに小学生が泊まっていいいのかなあ……………」  
「大丈夫だよ！ 私がいるんだから！」

ミソラちゃんも小学生じゃん……。  
と思ったが、口にはしなかった。

こうして、長い旅行が始まるのだった。



### 第13話 ホテル（後書き）

なんか、今日は疲れていい小説がかけませんでした。  
すみません。

明日、バスケットボールの試合なので、  
更新できる可能性が少し低いです。

出来なくても許してくださいね！（笑）

## 第14話 謎の男(前書き)

今回は、会話文を多くしました!!

## 第14話 謎の男

「私、お風呂入ってくるね！」

「うん！ 行ってらっしゃい！」

そう言つて、ミソラちゃんは

お風呂の一式を持って、浴場へ行った。

僕は外の絶景を見ていた。

緑の広い平原。真つ青の快晴。

全てが最高の環境といえるだろう。

『俺達は今からどうするんだ？』

「夕食が7時からだし、時間があるね」

『何か、軽食でも買いにいかねえか？』

「この辺、お店ないよ」

そういつと、ウォーロックが出てきて、

まるで「甘いな」とでも言いたいような、顔をした。

その表情はひどいだろうと思つたが口にはしなかつた。

『電波変換で札幌に行けばいいじゃねえか！』

「あゝ！ そうか！ そうと決まれば……………」

僕はハンターV Gを天井に上げて、叫んだ。

「トランスコード！ シューティングスターロックマン！！」

僕は変身して、札幌へと向かつた。  
が、様子がおかしかつた。



車が横転していたり、人が倒れていたり……。  
何があっただらうか？  
僕は地上に下りて、探索を始めた。

『ほとんど、気絶しちまっているな』  
「何があっただらうね？」

すると、ウォーロックの表情がとたんに険しくなった。

『スバル、何か来るぞー!!』  
「え!!!？」

向こうのほうから人がやってくる。  
鋭くて、大きい鎌。  
黒く身を包んだ、電波人間。

「ロックマン……か」  
「お前は誰だ!？」  
「私の名前は、サーベル・ダークネス」

サーベル・ダークネスと名乗る男は、  
落ち着きを払いながら、話した。

「何のようだ!」  
「貴様の力が欲しい……………」  
『は?』

力?  
何のことがよく分からない。

「貴様の力を手に入れて、この地球を手に入れる……」  
「そんな事、させるもんか！！ 僕が止めてみせる！！」  
「ふっ……貴様には出来るかな。今、貴様を倒すのは惜しい。また  
会おう、青き戦士よ」

そういつて、サーベルダークネスは去っていった。

## 第14話 謎の男（後書き）

どうですか？

試合、負けた……悔しい……！！

相手は愛知トップクラス、勝てませんでした（泣）  
次回、頑張ります！

## 第15話 ナイフ

(誰だったんだろう……あの男……)

僕は自分の心の中で出るわけの無い、  
解を求めるために自問自答していたが、  
ただ単に堂々巡りを繰り返しているだけだった。  
倒すとは言われたものの、雰囲気はまるで和やか  
そこだった。

僕が一番引つかかっていたところは。  
真顔で倒すとは言われたのに、和やかだった雰囲気。  
この、ヒントだけで堂々巡りを繰り返していた。  
だが、いつまで経っても解は出るわけ無いのでいったん思考中止し、  
ソファに座ってテレビを見た。

「今日のゲストは、あの大人気シンガーソングライターの響ミソラ  
ちゃんです！」

「よろしくお願ひします！」

テレビをつけると、司会者がゲストと  
マンツーマンでトークをするという、オーソドックスな番組である  
「君子の部屋」がやっていた。

決して、現実にある、「0子の0屋」ではないので勘違いしないで  
欲しい。

20分後。

番組は終盤に近づいていた。

その頃、一人の女性の叫び声が聞こえた。

「きゃあああああ~~~~~!!!!!!」

僕は眉をひそめ、部屋を飛び出し  
声の発端元に向かった。

（ミソラ視点）

「ふー、すつきりした」

『浴衣に着替えて早く部屋にもどりましょ』

私はお風呂から上がり、脱衣所に来ていた。

浴衣に着替え終わり、私は脱衣所をでて

牛乳の販売場所に行った。

私はコーヒー牛乳を、買い、すすっていると

背中から謎の男が現れた。

「誰？」

「……………死んでもらおう」

「きゃあああああ~~~~~!!!!!!」

私の腹部に、グサツという鈍い音と同時に小さいナイフが刺さった。

「っ……………!!」

私は意識を失い、そのまま倒れた。

「フフフフフフ……無様だ」

第15話 ナイフ（後書き）

ミソラファンの方。

本当に申し訳ありません！（ペコリ）

## 第16話 天使の涙

「ミソラちゃん!!?」

僕が駆けつけた時にはミソラちゃんは倒れていた。

僕は不意に涙がこぼれてきた。

どうして、僕は大切な人を護りきれなかったんだろう

自分が恨めしくて仕方が無い。

大切な人を護れなかった悔しさ、悲しさが  
涙に混じって浮き出てくる。

『スバル、かすかだがミソラからの周波数がでているぞ!』  
「ていうことは……生きている!!!」

とたんに前向きになった僕。

「犯人を探そうか……」

そう言ったその時だった。

上から少女が現れたのだった。

「ロックマンね?」

「え? う、うんそうだよ?」

少女は上から降りてきて

ミソラちゃんの胸に手を当てる。



「何をやっているの？」

「この子……生きているわ」

「え!？」

「私の力で……!!」

少女はミソラちゃんの体を触り、目を閉じた。

すると、ミソラちゃんの体がだんだん光っていくように見えた。

そして、全体が光に包まれると、少女は光り、ミソラちゃんはまだ眠っていた。

「貴方とはまた会うことになるでしょう……では……」

そついい残して不思議な少女は消えていった。

しばらく呆然と立ち尽くしていると、ミソラちゃんが目を覚ました。

（ミソラ視点）

私は目を覚ますと、スバル君が横で立ち尽くしていた。

「あれ？ 私、何やっていたんだらう……？」

「ミソラちゃん……!!」

スバル君は泣きながら、私を抱いた。

私の肩のところに天使のような綺麗な涙を流していた。

「ミソラちゃん……ごめんね……僕が護れないばかりにこんな怖い  
思いをさせて……」

彼の涙は止まる事が無かった。

私は、そんな泣いているスバル君を黙って、笑顔で見守ることしか  
出来なかった。

## 第16話 天使の涙（後書き）

お久しぶりです！

テストでなかなか更新できませんでした・・・。

読者の皆様、ごめんなさい（ペコリ）

こないだ、僕の友人に

「お前って嵐の二宮和也に似てるよな」

って言われました（笑）

「全然似てねえよ（笑）」

って言い返しましたが（笑）

では、テストが終わったらバリバリ更新しますのでお楽しみに！！

第17話 護る事(前書き)

久々に結構かきました(笑)

## 第17話 護る事

時は流れて今は夜。

僕はあの時の記憶を消せずにした。

ミソラちゃんはあれから、温かい笑顔で僕を抱き返してくれたが  
でも僕の中では

やっぱり、護れなかったことに変わりはない。

という葛藤が僕の心の中で暴れていた。

ミソラちゃんはもう疲れたのか、すっかり眠っている。

僕は寝ようと思ったが、窓をみたら夜空が物凄く綺麗だったので  
ベッドからでて、ベランダに行き、夜空を見上げた。

満点の星空が僕の視界にうつり、やがて僕の表情を笑顔にへと変えて  
いった。

「綺麗だね、ウォーロック」

『ああ、田舎だからこんなもんだろ』

「なんか、心が洗われる気がするよ」

『心を洗えるわけねえだろ』

どんだけ、夢の無い奴なんだ！

って僕は思った。

そんな風にいったウォーロックに僕はつい苦笑してしまった。

「でも、ミソラちゃんを護れなかった……」

『スバル……』

僕に来る罪はきわめて重いものだった。

表情がだんだん俯いていく。

『なんで、そんなにお前はそんなに引きずるんだよ。なんか変な気がするんだよ』

「僕の気持ち分かるわけ無いだろ！！」

つい声を荒げてしまった僕。  
ウォーロツクも驚いていた。

「ごめん、大声出して」

『ああ……きにするな』

「で、何だった？」

『確かに護ることは出来なかった。でもミソラは喜んでいて。何で分かるか？』

僕は、そんな単純な質問でさえ答えることは出来なかった。

『それは、お前が姿勢を見せてくれたからだよ』

「姿勢？」

『そう。護ってみせるというその思いを見せてくれたからだ。だから、ミソラも嬉しかったんじゃないのか？』

『その通りよ』

会話の横槍を入れてきたのは  
ミソラちゃんの、ウィザードのハープだった。

『げっ！ ビックリするじゃねえか！！』

『アラ、失礼ね人をお化けみたいに言っつて』

いやいや、人じゃないだろう

と心の中で鋭い突込みを入れる。  
まあ前まではお化けみたいなもんだったが、今ではウィザードとして立派に働いている。

『とにかく、スバル君、貴方に泣いて謝られた時はとても嬉しそうだったわ。だって、護ってくるそんな男の子なんてスバル君ぐらいしかないから』

やっぱり、ウォーロックの言うことは正しかった。

長いこと一緒にいるだけあって、人の気持ちまで分かるようになったのだと

改めて実感した。

人は見かけによらないもんだなあとも思った。

おっと、ウォーロックには失礼だった。

「じゃあ僕寝るね」

『ああお休み』

僕はすやすやと夢の世界へと飛び込んでいったのだった

。

第17話 護る事(後書き)

ああ、勉強うつとうしい!!

あつ、愚痴を言ってしまった(笑)

数学(幾何)わからないし、理科も電流がめんどくさい!

ああ、だれか教えてください!!

そして、助けてください!!



第18話 宗谷岬（前書き）

なんかタイトルがわかりやすいなあ・・・。  
まあいつか（笑）

## 第18話 宗谷岬

翌日。

僕は眩しい太陽の光で、目覚めた。

気持ちの良い光が僕の体をすつきりさせる。

さらに言えば体内時計がリセットされたと言えるだろう。

ウォーロックもまだ寝ている。

横を見ると、ミソラちゃんが寝ていたベッドには

もうミソラちゃんの姿は無かった。

おおかた、もうリビングにいるのだろうと思い、

僕はリビングに向かった。

ちなみに勘違いして欲しくないのは

ここはあくまでホテルなのでそこを忘れずに。

「おはよう、ミソラちゃん！」

「あっおはよう！」

ミソラちゃんはもうすでに着替えていた。

服装は普段のボーイッシュな感じではなく、本当の女の子みtainな感じだった。

髪型はいつもどおりだったが、

服装は白いワンピースを着ていた。

普段も可愛いなと思うのだが今日のはもっと可愛いなと思えた。

「朝食食べなよ！」

「ありがとっ、ミソラちゃん！」

僕は席に着き、ミソラちゃんと一緒に朝食を食べ始めた。

やっぱり、朝食は美味しかった。

ミソラちゃんは料理の腕もあるかも知れない。  
こういうのを四字熟語で「才色兼備」というのだろうか。

「スバル君、もう大丈夫？」

「え？ 何が？」

「気持ちだよ！ なんか昨日私を抱きながら泣いていたじゃん」

『ああ、もう大丈夫だぜ』

なんで、ウォーロックが答えるんだという突っ込みと

いつの間にか起きたんだという疑問が混ざった。

つい、僕は苦笑してしまった。

『だから、アンタはガサツなのよ』

『んだと！！』

そんな2人（この場合2体というのが正論だろうか）はまた喧嘩を始める。

僕たちはそんなウォーロックとハーブのやり取り（喧嘩）を笑いながら見ていたのだった。

2体の喧嘩が終わると僕は、着替えをして、

荷物をまとめた。

なんだか、名残惜しかったなあというのが僕の正直な感想だった。

僕達はチェックアウトを済ませ、これからの予定を話し合った。

「これからどうしようか？」

「何かいいところ行かない？」

「宗谷岬いかない？」

「そつやみさき？」

宗谷岬と言うのは、作者の話によると日本でも最も北にある、岬のことである。ちなみに最も北にある都市が稚内わっかないという変わった読み方をする。

先ほども説明したが、北海道にはアイヌ語というもともとの先住民族の言葉から都市名になったところも多い。先ほど取り上げた「ニセコ」以外にも「倶知安町」とか「苦小牧」とか。

読み方は分かったら結構凄い……と思う。つまり、稚内もその変わった読み方の一つである。作者は宗谷岬で買った気温計を持っているらしい。

『ほお！ なかなか面白そうじゃねえか！ 行ってみようぜ！』

『じゃあ行きましょうか！』

「「お~~~~~!!」「」

と言うことで僕達は稚内へと向かったのだった。

第18話 宗谷岬（後書き）

実は僕、平泳ぎが大の苦手です・・・。

今日プールの時間友達に「溺れてんじゃねえ？」って勘違いされま  
した・・・。

嗚呼、なんて醜態・・・（泣）

一応僕は自称完璧主義者です（笑）

評価・感想まっってます！

第19話 ヘストショット(前書き)

最近文章力が落ちてきている……。  
人称変えようかな……。？(笑)

## 第19話 ヘストショット

日本最北端の地、宗谷岬。

僕とミソラちゃんは道なき道をひたすら進んでいった。そんな苦勞をしていると、前方に青の光が見えてきた。

「うわあ~~~~!!!!」

僕が目の当たりにしたのは、澄み切った青い空。グレートバリアリーフよりも美しいかも知れない、エメラルドのような広い海。そんな光景を目の当たりにした僕たち。ふいに涙が出てきそうだった。

「綺麗だね〜!!」

「本当だ、日本にこんな美しい海があったなんて……!!」

ウォーロックとハープも美しさに感嘆の声を上げている。僕たちも呆然としていた。

「地球に生まれてよかった〜!!」

ミソラちゃんが青い空を見上げながら、

織田雄二のモノマネをする。

ギャグを言うミソラちゃんに僕は苦笑してしまった。

でも、地球に生まれてよかったとは正直思う。

もし、生まれていなかったら、

こんな美しい景色も見れないし、素晴らしい友人たちに会うことす

らできない。

モノマネは除いて、本当によかったなと思う。

「スバル君、写真撮ろうよ！」

「え？ 写真？？」

「ウィザード・オン！」

ミソラちゃんはハンターを操作して、  
ウィザード・オンをして、ハーブを出現させた。

『ほら、ウォーロックも出てきなさい』

『ちえっしょうがねえな〜！』

そういつてウォーロックは勝手にウィザード・オンして  
ハンターから出て来た。

いつも、どうやって勝手にやっているんだ？  
と、僕はいつも思っている。

まあそこら辺は気にしない。

「並んで、並んで〜！」

ミソラちゃんの声と共に、僕達は寄り添いあつ。

「はい、チーズ！」

ミソラちゃんはシャッターのボタンを押して、  
こっちへ近づいてきた。

僕たちが最高の笑顔でカメラと向かい合うと

。



パシヤ……

最高のベストショットが完成したのだった

。

## 第19話 ヘストショット（後書き）

やっぱり、落ちてましたよね。

すみませんでした。

最近、ちよつとスランプになっちゃいました・・・。

なんか、最近書いてて面白い小説が書けなくなっちゃったんですよ・・・。

僕の悩み聞いてください・・・（泣）

あと、これで1st storyは終了です！

次回からは2nd storyにはいりますので・・・。

評価・感想待ってます。

【2nd story】第20話 テスト週間

2nd story

『今日も学校か、憂鬱でしょうがないぜ』

「なんでウオーロックが溜息ついているのさ」

早朝、6時27分。

今日は学校の部活の説明会があるのだとか。

僕は部活に入る気は毛頭ない。

サテラポリスだけでも手一杯だからだ。

時は流れ、3時間目の授業。

今日の社会は水野先生の日本史の授業だ。

日本史ほど死にそうな教科は無い。

僕が外を眺めていると教室から誰かの大声が聞こえる。

「星河！」

「はい!？」

「観応の擾乱は、足利尊氏の弟の誰が起こしたんだ？」

「わかりません」

「棒読みか、お前」

分からない時は棒読みで言うのが僕の癖だ。

「いいか、観応の擾乱は高師直が起こしたんだ

」

これは、中学生がやる授業内容ではないかと、僕は思った。

ちなみにこれは高校の日本史なので  
高校生の人ならさっきの問題でも解けただろう。

大嫌いな社会が終わり、気づいたらもうホームルームになっていた。  
先生が、生徒たちを眺めながら話を切り出す。

「明日から、テスト週間だから、しっかり勉強しろよ」

全く、めんどくさい物がやってきたものだ。

テストと言つものほど、うつつしくめんどくさいものは無い。  
僕はそう思っている。

他の人はどう思っているか知らないが。

学校で、今日分の宿題を済ませて校門を出た時は  
もう夕方になっていた。

茜色に染まった夕日と夕焼けを見て、僕は立ち尽くしていた。  
いまいち、何でかは分からないが。

家に着くと、もう母さんが帰ってきていた。

父さんはまだWAXAワックスで働いているのだろうと察した。

「早く、手洗い、うがいしてご飯食べちゃいなさい」  
「はい」

そういわれて、僕は洗面所に行って  
手洗いうがいを済ませ、夕食を食べ始めた。

なんか、今日の夕食は美味しく感じられた。

とは言っても毎日母さんが作る料理は美味しいのだが。

「なんか、今日の母さんの料理特別に美味しいね」

「ふふふ。スバルもやつと物心が付いたのね」

いや、もうとっくに物心は付いているんだけど……。

と思ったが、口にはせず苦笑した。

家族ってやっぱりいいなと改めて実感したのだった。

そして、テスト週間だ〜！と気合も入れたのだった。

【2nd story】第20話 テスト週間（後書き）

どうでしたか？

スランプはまだ続いています。少し前よりはマシになりました。

沢山の励ましのコメント、ありがとうございます！

次回も頑張りますのでよろしくお願いします！

## 第21話 回想

「はー私も勉強しなきゃな」

私は最近行っていないが、地元の中学校で

期末テストのテスト週間が始まったと言う連絡が来た。

範囲は聞いたが、先生の話を聞いてないので全くわからない。

一応私もテストだけはちゃんと受けている。

勉強が分からなくて憂鬱になっている私に、ハープが助け舟をだした。

『スバル君と一緒に勉強すればいいじゃない!』

「あ、それいいね! 今からスバル君に連絡を取ろう」と

ハープにそういつて私は

ハンターのアドレスサーバーに検索し

スバル君に電話をかけた。

プルルルルという音が、

より一層私の期待を大きくさせる。

「あ、ミソラちゃん! どうしたの?」

「スバル君って明日暇?」

「ごめん、遊びにはちよつといけないんだ、テスト週間に入ったから……」

「違うよ、別のことだよ!」

「え?」

なんか、スバル君が驚いた表情をしている。

心の中でクスって言ってしまった。

「一緒に勉強しない？」

「ああそういうことね。いいよ！」

「ありがとう、スバル君！ じゃあ明日私の家に来てね！ 地図は今から送るから！」

「わかった！ じゃあね！」

そついい残して、スバル君との電話は終えた。

私は、スバル君に渡す地図を作ってメールで送ろうとしている。

メールの送信が完了した。

私も家で勉強しようという気が全く湧かなかった。

『ミソラ、もう7時よ』

「あつ本当だ。ご飯作らなきゃね」

『ええ』

私は一階に降りて、台所へ行った。

エプロンをつけると、私は料理を作り始めた。

コン、コンと包丁がまな板にあたる音、野菜を切る音。そんな効果音だけがリビングに響いていた。

台所から見える、夕食を食べる机を見ると

私が6〜8歳ぐらいだったことを思い出す。

「ママ〜！ ご飯まだ〜？」

「もうすぐよ」

私は、椅子に座って、



ママを急かしているシーンを思い出していた。

ママはもう、料理を作ってくれない。  
だから、自分でやるしかないんだ。

自分は前みたいない弱い人間じゃない。  
スバル君に会って、自分は一步前へ踏み出せたんだ。

思い出す過去の回想が、  
私を駆り立ててくれる。

あれ？

なんで、私こんなに語っているんだろう？？

そう思った私はつい

自分のことなのに自分のことで苦笑してしまった。

「早く作っちゃお」

私は手を動かし、料理を作っていくのだった。

## 第21話 回想（後書き）

初めて携帯で投稿しました（笑）テストが近かったので更新できま  
せんでしたm（――）mというわけで次回もお楽しみに！

## 第22話 前門の虎、後門の狼

「はっ！！？」

大量の寝汗が、僕の額を支配していた。

ハアハアと荒い息をしていることを僕は気づいた。  
今頃だけだ。

「スバル、大丈夫か？」

「はあはあ……」

全く、いきなりこんな恐ろしい夢を見るだなんて想像もしなかった。  
というより、まずこんな夢を見たくも無かった。

夢の内容は、ロックマンになった自分が  
ウィルスに、殴られ、蹴られ、弄ばれた後に  
デリートされると言う夢だ。

実際こんなことはないが、現実になったら相当怖いだろう。  
まあそれはさておき。

僕は多量の汗をタオルで拭き、

1階へ行き、朝食を食べ始めた。

悪夢から開放された後に食べる朝食は  
何故か、至福な時間とも感じ取れた。

朝食を食べた僕は部屋に戻り、テスト勉強をやり始めた。  
とはいっても、今日はミソラちゃんの家に行く日なので、  
どうせ、勉強することになるが、まあ今やってもいいかと心の中で  
つぶやく。

宿題に手をつけた僕。

最初のほうは簡単なので瞬殺なのだが、  
後のほうに来れば来るほど、段々難しくなってくる。

「あゝわかんないな……」

『俺が教えてやるうか?』

「できるの!？」

『先生のハンターから情報を盗んでやるぜ……へっへっへ……』

ジャミンガーみたいな笑い方をする、ウォーロック。

いやいや、僕怒られるどころか、謹慎になっちゃうよ?

と主張したが、嘘だよと言り返された。

嘘じゃないな。多分。

その後、解説を見ながら無事にとくことが出来た。

僕はそろそろ、休憩でもしようと、1階で何か飲み物を取ってこようとした。

ところが、一難去ってまた一難。

なんと、飲み物が何も無いのだ。

「はあゝしょうがない。買ってこよう」

『面倒くさいな。もうロックマンになっていかねえか?』

「なんか、今日は言わないの?」

『あん?』

「だって、いつもだったら電波変換は道具じゃねえ!とかいうじゃん」

『まあ今回は俺もめんどくさいからな』

「まあいつか」

ということ、僕は電波変換して地元のスーパーマーケットに向か

った。

電波変換した甲斐もあって、僕は早くスーパーに着いた。僕はジューズを4本ぐらい買ってスーパーを出た。

家に着くと、一人の少女が立っていた。

「誰だろう?」

『近くに行けば良いんじゃないか?』

「そうだね」

目を凝らしてみると、そこにはミソラちゃんが立っていた。

「あー!」

ウェーブロードからおりて、電波変換を解除すると、ミソラちゃんがこっちに近づいてきた。

## 第22話 前門の虎、後門の狼（後書き）

テスト終わった〜!!

と言うわけで今日からバリバリ更新していきますのでよろしく願  
いします！

ていつか今回はきりがなんか悪いですね・・・。

第23話 真剣（前書き）

なんか、久しぶりだなあ（笑）

### 第23話 真剣

ミソラちゃんは何故か自宅の目の前に来ていた。どうやら、ベイサイドシティでは騒音が最近激しくなっているらしいので

僕の家で勉強しよう、思ったらいいのだ。

僕はその願望を承諾し、ミソラちゃんを家の中に入れて自室に案内した。

部屋に入ると、僕は机を置き、エアコンをつけた。

そりゃ快適に勉強したいと僕が思ったからだ。

勉強をして、しばらくすると、ミソラちゃんが聞いてきた。

「スバル君」

「何？」

「この問題わかる？」

その問題は1次関数の利用という問題だった。問題文は、こんな感じだ。

2点A(0, 4)とB(-8, 0)を通る直線 $y \parallel 1/2x + 4$ と  
2点AとC(4, 0)を通る直線 $y \parallel -x + 4$ がある。  
4点DEFGがそれぞれ線分OC・CA・AB・BO上にあるような  
な長方形DEFGを作る。

この長方形が正方形となる時、点Dのx座標を求めよ。

「うーんと、これはね……」



と、僕は一つ一つ丁寧に教えていった。  
よくみると、ミソラちゃんの顔がすこし紅潮しているのが窺えた。  
恥ずかしさがこみ上げてきたのだろうか。

「ありがとう、スバル君！」

「うんうん、気にしないで！」

僕達は着々と勉強を進めていく。

部屋の中にはシャーペンを走らせる音しか聞こえない。

僕は、1問解き終わり、分からないところは無いかなと思い、  
ミソラちゃんを見る。

彼女の顔は、真剣みをとても帯びていた。

普段見せる表情とはまるで違う、別人のような表情だった。  
それぐらい、ミソラちゃんは集中しているのだろう。

「一回休憩しようか？」

「うん！」

この言葉を発するとミソラちゃんは  
いつも見せる明るい表情に変わるのがある。

時は流れ、午後6時。

ミソラちゃんの顔は真剣みと疲労が溜まっていた。

「もう、帰ったほうがいいんじゃないかな？」

「そうだね、私帰るね！」

「じゃあね、ミソラちゃん！」

「うん！」

ミソラちゃんは用具を片付け、玄関で電波変換して帰って行った。

やる時はやるんだなあ……

と、僕は心の中でそっと呟くのだった。

## 第23話 真剣（後書き）

最近忙しくて更新できませんでした・・・。  
誠にすみません。

評価、感想待ってます！

## 第24話 テスト当日

時は流れてテスト当日。

僕が教室に入ると周りが何故か殺気に満ち溢れていた。

皆相当必死なのだろう。

だが、今日のテストを終えればおそらく今の雰囲気は嘘のように思えるだろう。

皆が教科書・参考書を読んでいる人もいれば

テスト問題を出し合ったり、雑談している人もいる。

ゴンタはどれも該当しないことをしている。

教室に試験監督が入ってくる。

全員が着席し、教室が静寂の空間となった。

「問題用紙と解答用紙を配ります」

前から順に配られていく。

しばらくすると自分の机の上には

「英語 問題用紙」

と、書かれた問題用紙が配られた。

僕は昨日の夜までずっと英語をやっていたため  
相当の自信がある。

なんかナルシストっぽい言い方だったが気にしない。

「始めてください」

問題用紙をめくる。

最初の問題は適語を入れる問題だ。

( ) you study English yes  
terday?

.....秒殺だ。

答えはDidだ。

こんな感じでテンポ良く答えていく。

あっという間に1時間目の英語は終了。  
次は最も得意とする理科だ。

「さあ、今日も頑張って行きますか！」

『おう!』

「星河スバル.....いや、ロックマン.....どこにいる?」

俺は今、太平洋のウェーブロードを渡っている。

だが、俺には綺麗とも汚いとも思えなかった。

心が無になっているからだろう。

しばらく渡っていると、なにやら大陸が見えてきた。

「あれは.....!? まさか.....そんな馬鹿な!!?」

俺が目の当たりにしたものは信じれない光景だった。

「よし、これで全て終了だ！ 明日は終業式だからな！」

「「「さよならー！！」「」」

僕達は、室長の号令と共に家に帰った。

ハンターを見ると1通のメールが届いていた。

『スバル君ありがとう！！数学がめっちゃできた気がする！！いろいろありがとう！！』

感謝の手紙だった。

僕、いい事した！！

と、思いながら家のドアを開けたのだった。

【2nd story finished。】

## 第24話 テスト当日（後書き）

今日は終業式です！

そして、明日は大会！！

いろいろ忙しくてたまりません・・・。

評価・感想お待ちしております！！

## 最終話 星空

【Last story】

時は大きく流れてクリスマス。  
僕はミソラちゃんと一緒に町を歩いていた。

「ありがとう、スバル君誘ってくれて」

「うんうん、ミソラちゃんが仕事で忙しそうだったからさ」

ミソラちゃんの笑顔は僕の心を癒してくれる。

今までも彼女の笑顔に何回支えられてきたか。

それは数え切れないほどだろう。

彼女の笑顔で、今僕は強く大地を立っているのだ。

彼女には感謝することが山盛りだ。

「あー!!」

「どうしたの?」

「綺麗な星空〜!!」

満点の星空。

それはまるで僕らを照らしてくれるかのようにだった。

また、僕らの心までも明るくしてくれたかにも取れた。



「ミソラちゃん」

「何？」

僕は真剣な顔でミソラちゃんの瞳を見つめる。

ミソラちゃんは驚いているのか顔を少しばかり紅潮させている。

「あの、星空を　　捕まえに行こう!!」

「うん!!」

彼女は僕の話をもたも笑顔で返事してくれた。

「行くよ、ウォーロック!!」

「行くわよ、ハーブ!!」

「おう!!」

「ええ!!」

そして、2人は空に向かって叫んだ　　。

「トランスコード!!　ハーブノート!!」

「トランスコード!! シューティングスターロックマン!!!」

青き光と赤き音色は空の彼方へと飛びだって行ったのだった。  
。

流星のロックマン【Our life】

完結

## 最終話 星空（後書き）

申し訳ありません。

この小説はこれにて完結とします。

そして、執筆活動は当面の間休止させていただきます。

応援してくださった方々、

今までありがとうございます！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0770h/>

---

流星のロックマン【Our life】

2010年10月11日13時56分発行